

## ○ 広島県建築士会「公開まちづくりセミナー」報告

テーマ：Good Circular Place—好循環の場をめざして—  
講師：建築家 仙田 満



主催：広島県建築士会  
日時：2024年3月6日（水）18:30～20:30  
場所：広島県民文化センター



略歴：1941年生まれ。64年、東京工業大学建築学科卒、谷口吉郎、菊竹清訓に師事。68年環境デザイン研究所設立。84年以降、琉球大、名工大、東工大、放送大学の教授を歴任し、現在、東京工業大学名誉教授。2001年以降、日本建築学会会長、日本建築家協会会長、日本学術会議会員を歴任。2004年、こども環境学会創設、代表理事。主な作品に新広島市民球場、石川県立図書館、国際教養大学図書館、軽井沢風越学園、小田原三の丸ホール、等。

### 最近考えていること

#### 1. 教室のスタイルについて

200年前頃、前方に先生が立って生徒と向き合う今の規律訓練型または知識伝達型の教室スタイルがイギリスで誕生し、日本も明治維新後に導入。しかし、それ以前の中世の大学ではサークル型だった。今は一方的に先生から教わるのではなく、生徒自身が自主的に学ぶ方式に変えていこうという文科省の動きもあり、机の配置、空間の作り方を変えていかなければならない。

教室の研究を始めたのは軽井沢風越学園の設計に携わってからで、そこでは「楽しく自ら学ぶ」を中心にした学校を作ること为目标にし、学校全体が図書館のような建築である。

1・2階を吹き抜けにした大空間の図書室を中央に据え、周りの1階に音楽室や工作室などの特別教室を配置し、2階に一般教室を点在する配置。生徒は自分たちが学びの場を作っているという意識が高く、先生はスタッフの役割を果たしている。

今の日本は子ども・若者の自殺率が先進国の中で高く、幸福度も低い結果が出ているが、学校や遊び場所がワクワクして楽しい場所になれば、自殺率等も改善されるのではないかと。

子どもは親を選べないし、生きる場所も多くは選べないので、子どもの生きる場所を設計する建築家の責任は重い。



軽井沢風越学園（2020年完成）  
（環境デザイン研究所 HP より）

#### 2. 失われた30年

(i) 1990年前後にバブルが弾けて、失われた30年と言われて久しいが、経済的、社会的問題だけでなく、建築を取り巻く環境も多くの課題を抱えている。その一つが知的生産システムを阻む設計入札の問題である。会計法に基づき、公共工事の設計者を物品と同じように入札で対価の安い方を選ぶという原則が今も続いている。

バブルが弾ける前は設計者選定に入札はなじまないとして随意契約で行うことも多かったが、弾けた後に建設業界と政界の癒着が問題視され、競争入札へ移行していく。

1995年、設計者選定にプロポーザル方式が導入され、国の多くがプロポーザル方式になったが、件数でいうと自治体ではまだ入札が70%と多いのが現実である。

広島でもピース&クリエイト事業でデザイン力に優れた建築家から設計者を選定（コミッション方式）していたが、残念ながら1997年に終了している。

中国は縁故主義の国だが、1995年以降外資導入による知的生産は透明性を確保するために国際コンペを採用。その結果、世界からアイデアを集め、トップクラスに急成長。

設計入札の問題は建築学会や建築家協会でも取り組んだが、学術会議で政府に対し提言を提出し、対価でなく質で選定する設計者選定方式の議員立法化を目指している。

(ii) **子ども環境の悪化による創造力の減退**。遊ぶ力と学力はリンクしており、創造力を失えば未来はない。学校を含め、子どもの遊び空間量がどんどん減っており、自分の子どもの頃(1955年)の百分の一に減少し、遊びの意欲も喪失している。

外遊びの空間量と幸福度は比例し、創造性と幸福度はニアリーな関係だから、遊びの空間を豊かにし、幸せを感じられる空間を増やせば創造力も回復するのではないか。

(iii) **リスクを取らない生き方が蔓延**。日本社会は「出る杭は打たれる」、突出したものを嫌う風があるが、平均化しない、排除しないことが必要である。時代を変える人は発達障害的な人が多いと言われるが、長所を伸ばすことが大事。行動を変える力のある建築をつくるためには建築家もリスクを取らなければいけないし、リスクとは挑戦である。

### 3. 人とまちを元気にさせる方法、私の設計論

(i) 子どもが遊びやすい空間の構造“**遊環構造**”という理論を1982年に考え、実践している。その理論には7つの条件があり、①循環機能、回遊性がある、②その循環が安全で変化に富んでいる、③シンボル性の高い空間、場がある、④その循環にめまいが体験できる、⑤その循環が一様ではなく、近道がある、⑥循環に大きな広がりを取り付いている、⑦全体がポーラス(多孔的)な空間、遊環構造はそれらの条件を満足する空間で構成されている。

「めまい体験」とは、肉体的精神的に一時的なパニックを楽しむことであり、「**ポーラスな空間**」は、閉鎖的でなく回遊性のある開放的な空間である。

新広島市民球場や国際教養大学図書館の設計を通して、めまい空間は集まった人が共感・共鳴し、一体感を持つお祭り広場であり、中心に据えるべきと近年、遊環構造のモデル図を考えている。

・**市民球場**(2009年)：球場全体が回遊性のあるポーラスな遊環構造でコンコースが一周。200mのスロープを上がると球場内が開け、JR線側は低層にして新幹線からも覗ける。



国際教養大学図書館 新広島市民球場  
(環境デザイン研究所 HP より)

・**国際教養大学図書館**(2008年)：秋田杉による濃密な木造空間と遊環構造をもつ「杜の図書館」。半円形の大空間に段状の書架と閲覧席。

(ii) 近年気づいたのが、挑戦するためには**安心基地**が必要。安心基地とは、母親の腕の中にいるような空間。傷ついて故郷に戻り、癒されるような存在。その安心基地を建築や都市の中に作っていく。豊かな自然と愛情あふれる環境が子どもたちに困難を乗り越えさせる力になると考えている。

#### 遊環構造の事例紹介(抜粋)

・**石川県立図書館**(2022年)：公園のように目的がなくても訪れたい図書館を目指す。建物中心に設けた40m×50mの楕円形の吹き抜け空間は円形劇場を向かい合わせたような段状の空間。その空間に書架と閲覧席が置かれ、スロープで結ばれる。中国新聞に掲載された「本を探すというより、好奇心の海を泳ぎ回るような感覚で館内を歩き回った」という感想の記事が、遊環構造と安心基地を的確に表現している。



石川県立図書館  
(環境デザイン研究所 HP より)

これまで作ってきた図書館や公共施設の集大成と言える。

・**広島サッカースタジアム**(2023年)：位置的には南に平和公園、北に基町アパート、東に広島城、西に太田川があり、北を除いて開放的でポーラスな空間を狙う。構造的には張弦梁が成功している。屋根のスケッチに「peace wing」と記しており、それが施設名称に採用され驚いた。



城南通りの西側からの遠景  
(筆者撮影)

城南通りを広島駅から向かうと道路に覆いかぶさるような屋根を抜けているところが印象的。これができることにより新たなまちの回遊性が生まれることを期待する。

## まとめ

- ・SDGsが掲げる17の目標が叫ばれているが、省エネや省資源は当たり前として、これからは17番目の「パートナーシップで目標を達成しよう」という連携や協調を深めていくことが大事になってくる。
- ・建築家として子どもたちが健全に成育できる環境・都市づくりを中心に考えてきたが、その空間は大人にとっても幸せな環境、一体感を持つ環境につながる。こども環境学会の代表理事として、子どもにやさしい、地球にやさしい、地域にやさしい循環型社会を目指す。
- ・現在はコロナなどの感染症対策が必要となり、地球環境問題も切迫し、なによりも戦争に直面している今、建築家はもっと社会に発信すべきである。
- ・人間のワークとして、生きるための仕事、自分の証明とする作品、社会的な貢献・使命、と定義づけた哲学者がいたが、それに加えて持続可能な次の世代への継承を上げたい。
- ・建築家はまちを元気にするというある種幸せな職業である。小さな改善を積み重ねながら、ある時ふと気がつけば、大きな変革を遂げているという風に努力を継続していきたい。
- ・恩師の谷口吉郎先生は、1947年に島崎藤村の出生地に「藤村記念堂」をつくり、1965年に明治村を設計した偉大な建築家。その先生の座右の銘「一座建立」という、茶道での主人と客の一体感を意味する言葉があるが、自分も多くの建設に関わる人、利用する人、支える人と共感し、協力しながらものを作っていくという一座建立の姿勢を貫いていきたい。

## 質疑応答（要点のみ抜粋）

- ・広島中央図書館の駅前百貨店への移転計画へのアドバイスは？→子どもの図書館は室内外で読書できる方が良いので、低層で自然の中に位置する方が望ましい。駅中の図書館も成功事例があるので可能性はあると思われる。ビジネスや産業、観光、就職案内的な内容に特化させれば、存在感のあるものになるのでは。
- ・ピースウィングへの思い入れは？→初期の自分のスケッチに「peace wing」と書き入れていたが、場所的に丹下先生の平和軸を意識しており、希望が平和につながり、開放してまちと一体となることを願っている。
- ・菊竹清訓設計事務所時代のエピソードは？→大学を卒業し4年間師事したが、先生は所員の教育に厳しい人で、スタディの段階で20~30案をねん出することを求められた。常識を超えたアイデアが生まれ、その中から優れた案が選べることを知る。
- ・住宅設計に対するアドバイスは？→建築家にヒアリングすると、多くの人が子どもの頃の遊びの体験や生活空間が設計に影響していると言う。建築家が設計した住宅に育った20歳頃の青年にかつてアンケート調査したら、3割の人が建築系の道を選んでいるという結果が出ていた。それだけ子どもの頃の生活空間づくりは子どもに影響を与える。  
住宅設計では、敷地周辺も十分な調査を行い、子どもの遊び空間に配慮する。プランニングは1階に間仕切りの多い個室を置き、2階に居間などオープンスペースを配置する。その方が耐震性がよいし、避難も容易という2階居間居住という方式を若い頃やっていた。

## \*コメント\*

恥ずかしながら「遊環構造」は初耳であった。広島市民球場は試合のない日だが、何度か足を運んで、ポーラスな空間を楽しみ、テレビ中継を見ながら観客はめまい体験をしているであろうと想像できる。

一方、サッカースタジアムは南北の狭い敷地にどんな風に収まるのであろうと興味津々であったが、設計陣の頑張りにより立派なスタジアムが完成した。周りの広場も8月にはオープンし、このエリアがどのように変わっていくか目が離せない。

市民球場は設計コンペで仙田先生の事務所が選ばれ、サッカースタジアムは完成を急ぐためデザインビルド（設計施工一括発注）方式の公募型プロポーザルが採用され、設計はゼネコントップの構成員で仙田先生の事務所もその一員として参画された。

設計者選定がいかに重要かということを決る今回の講演で痛感させられたし、設計者の能力によって出来上がる空間に雲泥の差が出ることも改めて実感した。

また、地道な日常の活動の中に変革を追い求めていく姿に、建築家としてのプライドを感じた。  
(瀧口信二)